
Return Memorys

東 風林

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

R e t u r n M e m o r y s

【Nコード】

N 4 4 8 8 C

【作者名】

東 風 林

【あらすじ】

リザルトIIアドラーとリレイトIIアドラーのデコボココンビが織り成す、運命と戦いの――ギャグでコメディな物語？

S t o r y O (前書き)

こんにちは、風林です。

R e t u r n M e m o r y s ……略してリタメモは、私が以前マ
ンガで趣味として描いていたものを小説化したものです。

つまり昔の作品なのでこのS t o r y Oにはありませんが話が進む
につれて本編に出てくるギャグの時代風景（！？）が違いかもしれ
ませんが、気にしないで下さいねw（笑）

Story

「よしっ、できたッ」

明るい声と同時に、皿に盛りつけられたサラダが食卓にドンと置かれる。

色素の薄い金髪の、前髪を結んだ小学六年生ほどの男の子が、自分の並べたサラダを満足気に見て、次に目の前の長髪黒髪の少年を見詰めた。彼はその艶のある黒髪を後ろで一本に纏めている。

「今日の朝食はリレイトスペシャルサラダ！ さあさあリザっ早く召し上がれ！」

男の子は無邪気に笑って少年にサラダを薦めるが、リザと呼ばれた少年は依然無表情で、そのサラダを見据えている。

「何がスペシャルだ普通じゃねえか。サラダだけに2時間もかけやがって」

彼の表情には怒りを表すマークさえ浮かんでいるように見える。

男の子はしゅんとなり、潤んだ瞳で自分の指に視線をやった。

「…………指ケガしても頑張ったのに」

「知るか。」

一言で切り捨てられる。

少年はサラダを口にしようとはせず、席を立ててしまった。

「リザッ朝食は！？」

「パンでも食うからいい」

そう言って無表情のまま背を向ける。ボソッと、誰がりざだと呟いた。

「酷いよりザーっ！」

その呟きが聞こえたのか聞こえてないのか、男の子はギャーギャーと泣きわめく。

「何回言ったらわかんだよ、このチビが！！」

「チビじゃないやいっっ」

少年に足で蹴られ、男の子は泣き顔で弱々しい声を出した。

「足跡ついたじゃんか…ひどい…」

だがそうは言いながらも、男の子はちゃっかりサラダをぱくついていたのだった…。

Story 1

オレの名はリレイトⅡアドラー。

歳は12歳。背の順だと前から……言いたくない！

そしてこの人はリザルトⅡアドラー。通称リザ。

オレより2つ上の14歳。

え、兄弟かって？

違うんだなあ、コレが。

オレ達は何を隠そうイ・ト・コなのだ！つまり親同士が兄弟だつてコト。

でもオレ達の親の場合、姉妹らしい。

じゃあ何で苗字が同じかって？

まあまあ、焦らないで聞いてよ！

このままだとオレ達苗字違うんだけど、オレ達のお父さんがどっちも逃げちゃったらしくて。

オレ達は母親の旧姓になったんだ。ま、コレはオレ達が生まれて間もない時の話だけど、さ。

そしてお母さんかというと……事故だか何かで逝ってしまわれたらしい。よ。

しかもじっちゃんもばっちゃんも既に他界済み。

引き取ってくれる人、皆無。

それも小さい時の話。2人じゃ生活できないし……

小さい時は2人まとめて『シンセキノオジサン』が世話してくれてたっぽいんだ。

何はともあれオレ達は今は2人で生活しているわけで、生活費はと言えば……

「こんにちは――」

「はい、こんにちは。今日は早いね、リザルトさん」

小さいが綺麗な店に入ると、50代くらいのおばさんがリザルトを迎えた。

「ああ。今日はゴセさんがいないから大変だろうと思って」

そう言いながらリザルトは店の奥に入って行く。おばさんは店の端っこに積んであったダンボールを持ってリザルトの方に歩いて来た。

「そ、そうっありが、と……と、ととりあえずこれを向こう……に
っ運ッ、痛っっ！」

「マ：マーサさん、無理なくていいから」

リザルトは駆け寄るとマーサの抱えていたダンボールを受け取り、
軽々と運ぶ。

「悪いねえ……」

イタタ、と唸りながらマーサは感謝の念を表す。リザルトは微笑
んだ。

「いや……マーサさん達にはすごくお世話になってるし……」

マーサ＆ロットとゴセ＆ロットの二人は、近くで百貨店を営んで
いる夫婦だ。子供がいない為か、俺達の事を本当の子供のように可
愛がってくれている。

俺が14なのに働けるのも、この二人のお陰だ。

「――ただいま」

「おかえりー！」

リザルトが家に帰ると、出迎えたのはいつも通りハイテンション
なりレイトだった。

ゲームのCDをくわえて走って来る。

何でもかんでも口にくわえるのは、彼のクセだろう。

「見て見てー超難しいRPGゲーム、全クリしたっ！！」

「食うな。」

冷たい言葉で即答するリザルト。売れんだから、と言葉を付け足す。

裕福でもないこの生活で、クリアしたゲームは人気のあるうちに売り払う——というのはリザルトにとって当たり前の行動だった。

「つーかまだ学校の時間じゃねえか」

思い出したようにリレイトに疑問を投げ掛ける。リレイトは平然として、

「ん~~~~ジシュソウタイ？」

と答える。

「サボるな。」

「む——っ、そーゆーリザだってホントなら学生じゃん、中2じゃんっ」

リザルトは学校を病欠という事で休み、マーサとゴセの元で働いている。

本当ならいけない事だが、仕方のない事だった。

「俺が働かなかったら誰が働くんだよ」

リレイトに背を向け顔だけこちらを見ながら、そう呟く。だからオレだって働くよ！ と、リレイトは叫んだ。

「駄目だ。」

「何で……」

それでも食い下がるリレイトに、リザルトは一言、

「小学校くらい卒業しろ。」

と言った。

リレイトは返す言葉を探す。しかしその前にリザルトはいらない後付けをした。

「だってお前馬鹿だし」

「……どうせ……。そりゃリザみたいに天才的だったら文句ないだろサっ」

リザルトは言葉を返さない。ただ横目でリレイトを見詰める。

彼が頭がいいのは確かだった。こんなに学校を休み、塾にも行か

ず勉強もせずとも、たまに学校に行きテストを受けると全て常識問題のように解いてしまう。

「俺寝るから。おやすみチビ。お前も寝ないと大きくなんねえぞ」

「早っ！！チビじゃないってばあ！」

まだ時間も早いというのに、リザルトは寝室のドアを閉める。そんな彼とは違い、リレイトは少し夜更かしをする人だ。

「ちえ————お煎餅買ってきたのに……」

深夜。

リレイトさえも寝静まった頃。

リザルトは一人、布団の中目を開いていた。

何か、ひっかかる……——昔から……

俺の母親は、本当に死んだのか？

“違和感”

何か違う……何かが……

何故何とも思い出せない？

何かが………

Story 2 (前書き)

こんにちは、リタメモはやっと本題に入って行きました。ここまでではあまりそうは見えませんが、実はコレ、あまりシリアスな小説（元はマンガ）ではありません。マンガを読んで途中で『これギャグマンガじゃないよね!!?』と突っ込まれた事があります。完全シリアスな物語を期待している方はこの話以降は読まないでもう一つ連載している私の『フィッチ』という小説を読んで下さいね（ってオイ

まあ……最後の方は泣ける要素も入れたいなあ……なんて。

笑えて泣ける物語が理想ですけどねw

笑えず泣けない私の物語には程遠いです（笑

そんなこんなでReturn Memorys、お楽しみ下さいw
w（ムダな前書きだな

Story 2

朝焼けが、空を染めた。

陽射しが窓から差し込み、リレイトは目を覚まして起き上がる。大きな欠伸をすると、寝ぼけ眼をこすりながら隣を見た。

リザルトが、いない。

「……リザ？」

いつもならまだ寝てるのに……。

リレイトは首を傾げる。

その時、ガサ…と音がした。玄関からだ。慌てて駆けて行くと、そこには今にも家を出て行きそうなリザルトがいる。

「リザ！？ どっか行くの！？」

「……！」

リザルトはこちらに気付き、一瞬表情を険しくするが、またすぐに目を伏せてドアを開けようとする。

「リザ！」

返答は無い。顔も合わせようとしなない。

「むうっ……逃がすかつ」

リレイトはムスツとした表情を浮かべると、裸足で床を蹴り、軽々と跳び上がった。

そしてリザルトに蹴りをかます。

「てやああっ！」

「！？」

リザルトは突然の攻撃に驚き、しゃがむようにして避けるとリレイトに罵声を飛ばした。

「あぶな……てめ何しやがる、このチビ！！」

「一人で行くなら行かせない！ どこに行くのか教えらんないならなおさら！」

そう言いながら依然不機嫌極まりない顔で、スタッと地に下りる。

リザルトは何かを考えているのか間を開けてから、口を開いた。

「……お前がいると足手まといなんだよ」

彼が何をしたいのか、どこに行きたいのかはわからない。ただ、一人でどこかに旅立とうとしている事は確かだった。

リレイトにはそれが計画的な事なのか昨夜思い立った事なのかを知る由は無いが、一人で行かせる訳にはいかない。

しかし今は、黙ってリザルトの話を聞いていた。

「自分の記憶は自分で探す。お前が口出す事じゃねえ、いたってジヤマになるだけだ。わかったか？」

ただ彼の瞳を見据えながら黙っているリレイト。

そんなリレイトを見てリザルトは一言、付け足した。

「——それにお前を、危険な目に合わせる訳にはいかねえだろ」

彼にはこの旅が危険になるという確証でもあるのか、それとも単なる勘なのか、リザルトはそれ以上を告げる事もなく、ドアノブに手をかけた。

「だから……じゃあな」

「……」

リレイトは何も言わず、突然リザルトの後ろ髪を引っ張る。

「！」

リザルトが後ろを向くと、下から幼い目がこちらをじっと睨んでいた。

今まで黙っていたリレイトが口を開く。

「オレ、バカだからわかんない」

小さい声で、それでいてはつきりと、よく通る声。

「ごめん」

そしてそう、後に告げた。

何も言えず今度はリザルトが、リレイトの話を黙って聞いている。「ジヤマになるって言われてもジヤマになった時じゃないとわかんないし」

リレイトの手は既にリザルトの髪から離れているが、彼は逃げよ

うとしない。

「オレ、言われただけじゃわかんないんだよね」

頑なな意志を表した声が、静かな部屋に響いた。

リザルトは溜息をつくとき、額に手を当てながら言う。

「……わかった……着替えて来い」

間違いなく、リレイトの勝利と言えよう。

「まったく……お前にはかなわねえな」

そう言うとき、リザルトは笑みを見せた。滅多に自分に見せる事のない表情にしばし驚くと、リレイトはピースを掲げて

「だろ!？」と顔を綻ばせた。

「オレ達のキズナは最強だもんっ！　ホラホラ、トランプ占いとハートのエースが出ちゃいました！　うれしはずかしっ、キャッ」

「死ね。」

一言で切り捨て、リザルトは仕度を促した。

「とにかく長旅になるかもしれないねえんだから用意しろ！」

「……そーだねーこの旅……」かなり危険ポイし」

気が付けばリレイトは、スピードのエースをくわえていた。占いで出た結果なのか、さっきとは打って変わって怪しい笑みが浮かぶ。リザルトは沈黙の間リレイトを見詰めると、関係ねえよ、と呟いた。

そしてリレイトに聞こえないように心の中で、そっと呟く。

元々……『安全』な生活なんて、していないのだから……。

Story 3

「……おいチビ！ 準備にどれだけかかってんだよ！」

廊下の一角に、リザルトは立っていた。目の前にはドアがあり、『オレのへや。』と汚い字で書かれた札が掛かっている。

そこはどうやらリレイトの部屋らしかった。中から能天気な、『いま行くー』という間延びした声が聞こえる。

リザルトは少しの間その場に立っていたが、ふいにドアが開いた。「おまたせー」

「……は？」

中から出て来たその少年を見て、リザルトは思わず声を発する。

リレイトは、沢山の大きい鞆を持っていた。

「ごめんねおくれてー」

リザルトの少し引き攣った表情とは裏腹に、相変わらず気にさわるほどの明るさだ。

「やっぱりゲームはかかせないよねっ。P●PとG●AとD●は入ったんだけど、P●2とか大きいTVゲームがバックに入らなくてさあ」

よく見れば、鞆の中には硬そうなものしか入っていないように見える。服等がすっかり入っているかは、信用できない。

リザルトは怒りマークのついた顔で、リレイトに近付く。

「だからとりあえずゲームキュ●ブを入れッ」

喋り終わる前に、リレイトの顎をリザルトの足がとらえた。げしつと音がして、リレイトの顔が上を向く。

「全ておいてこい」

そう言い切るリザルトに乞うようにして、リレイトはその場に座り込んだ。

「せっせめてD●だけでもっ！」

「死にたいか？」

声色からして、完全に怒っている。

リレイトは『むゝっ』と唸り、食い下がった。

「そーゆーリザはカバンの中に不必要な物が入ってないってゆーの？」

「当然だ」

リザルトの流し目が、リレイトを見る。そしてすぐに自分の鞆を取り出すと、中身を確認し始めた。

「金・食料・寝ぶくろ・地図・明かり……」

「おみそれいたしました」

ふかぶかと頭を下げるリレイト。

ちなみに、たまに『おみそれいたしました』を『お味噌食べました』と言う奴がいるが、それは完全なる間違いだ。

そんなこんなで、1時間後、二人はやっと旅に出ることができたのだった。

「しゅっぱーっ！」

拳を突き上げて叫ぶリレイトの隣には、『やたらに元気な……』とリレイトに呆れているリザルトがいる。

……そして……その後ろから、『ううううう』という唸り声が聞こえる。

二人は固まり、鞆は手から離れて落ち、しばらくの沈黙が流れた後、おもむろに後ろを向く。

女だった。俯せに倒れている。金髪に大きなリボン、ヒラヒラのドレスのような服……。

個性的と言ってしまえばそれまでだが、女は確かに異彩な雰囲気放っていた。

……誰？ あんた誰？ お前誰？ てゆーか誰？ そもそも誰？

だいたい誰？ つーか誰？ 何か誰？ 全て誰？ うわー誰？

元々誰？ フツーに誰？ マジで誰？ 本気で誰？ 誰ですか？

もんもんと二人の周りに立ち込める疑問の言葉。段々何を言いた

いのかすらわからなくなってくる。

「す……すみません……少し……目眩が……ただけですわ……」

女はそう言いながら、ゆっくりと顔を上げた。化粧は厚い。見るからにどこかのお嬢様だった。

「あ……あの……食料をわけてもらえますでしょうか……」

大金持ちのお嬢様に餓えという言葉は、あまりに不似合いだった。しかし女は苦しそうな表情で、二人を見つめる。

「ヤダっ」

即答ッ！！！

そう思ったのと同時に女は心の中で「なんで?!」と叫ぶ。

無駄に早い返事だった。

「あ……あの……おなががすいてしましまして死にそうなのです……が……」

「ヤダっムリ！」

ひたすら否定を叫ぶリレイトに、リザルトは『何ムキになってんだチビが』とツッコむ。

すると、リレイトの瞳に涙が溢れた。潤んだ目でリザルトを見る。「だっ……だつてこの人にごはんあげたらっ、オレのごはんが少なくなっちゃうじゃんか……っ」

それを無言で見詰めるリザルト。

彼はもはや『連れて来なきゃよかった』と激しく後悔していた。

しかしそれは後の祭り、リレイトは我が儘にも大声で泣き出す。

女はびっくりした、というか引いたような表情で、それを見ていた。

仕方がなく、リザルトはポケットから何かを取り出す。

それはハーモニカだった。

静かに口を近付け、メロディを奏でる。綺麗な旋律に、大泣きしていたリレイトは突然『ばああっ』という効果音と共に笑顔を見せた。

女は更に複雑な表情になる。

……お……お……おやこ父子に見えるのは気のせいかしら……ッ!?

泣き止み『次、いぬのおまわり●ん吹いてー』と調子に乗っているリレイト、『もうやめだ』とハーモニカをしまうリザルトを見て、女はそう心の中で叫んだのだった。

あやしてるっ!?! 不自然っっ!!

声に出さず、激しくツッコむ。

周りから見れば一見、異様な光景だった。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n4488c/>

Return Memorys

2011年1月28日04時57分発行